

Title	ジン・ フェインの叛乱 (上)
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.12 (1916. 12) ,p.1647(23)- 1677(53)
JaLC DOI	10.14991/001.19161201-0023
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161201-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を動かした今回の開戦以來獨逸帝國の後援を恃んで異民族の抑壓をことゝせる埃太利政府に反抗して宰相暗殺と云ふが如き非常の決心を立てしめたのかも知れぬ。レンナー博士の主張の如く民族問題と政治問題とを分離す可しと云ふことになれば埃太利に於ける獨逸民族の地位は益々不利となるので、全獨主義者は今回の大亂を以て好機到れりと爲し、曾ては空想として排斥せられたシェーネラーやスタインの理想實現の機會近けりと信じて居ることであらうが果してその希望は達せらるゝであらうか。インスブルックからヴァイーンまでを獨逸帝國に合併することさへ困難と思はるゝのに、チエッヒ人の根據たるベームンをもプロイセン化せんことは不可能のことである。然るに開戦以來埃太利政府はチエッヒ人に苛酷な束縛を加へ本年六月の初には青年チエッヒ黨の首領で新スラヴ主義の主唱者として有名なベームン第一の政治家ドクトル・クラマルシュに死刑の宣告を下したと云ふが、かゝる壓抑は寧ろチエッヒ人の憤懣を益々甚しからしむるものでは無からうか。埃太利に於ける獨逸民族の地位も亦困難なりと云はねばならぬ。

ジン・フエインの叛亂(上)

占部 百太郎

一、動亂中の愛蘭——二、愛蘭人の國民性——三、英、愛蘭民族の衝突——四、愛蘭の國會——五、愛蘭人の國民的運動——六、フエイアン同胞團の叛亂——七、愛蘭自治法の賛否兩面

世界の耳目がヅエルダンやガリチャの戦場に集注せられて居た今春四月二十四日恰も基督復活祭月曜日に方つて、ダブリン市に叛亂が勃發して愛蘭共和國が宣言せられたと云ふ警報に接して世人は一方ならず驚愕した。越へて同月二十九日叛徒は無條件に降伏して巨魁以下夫れゝ處刑せられて、愛蘭の叛亂は殆ど全く鎮撫せられたかの外觀を呈した。然し其實餘燼は全く燃え去らず、愛蘭は今尙内面に於て甚だしく不穩の状態に在るやうである。今回暴動の中心たるジン・フエイン結社の巨魁を首めとし、獨逸と陰謀を通じたと云はるゝサー・ロージャー・ケース

メントを英國政府が死刑に處したたが爲、國の内、外に於ける一般愛蘭人の間に甚だしき怨惡を惹起した。然して一方に於て、愛蘭自治の反對者等はレドモンド其他愛蘭國民黨が今回の暴動に何等の關係も同情も有せざるに係らず、此舉を以て直ちに國民黨の信するに足らざる所以なりとして、従前よりも一層の決心を固めて自治法の實行に反對しやうとして居る。三十年間の努力と奮闘とを續けて、自由黨と愛蘭國民黨とは辛つと愛蘭自治法案を通過させ國王の裁可は經たけれど、今回の大戰亂勃發の爲、之が實施を見ることが出来ない。否、戰後に至つても之が實施を見ることは容易であるまい。英國政府は今春のダブリン叛亂を好機會として、一九一四年七月殆ど内亂を惹起さむとまでした愛蘭自治を一氣に斷行せむと、一切の交渉をロイド・ジョルジに依託した。而して其後問もなく、愛蘭自治法は直ちに實行し、唯だアルスター六州に限り其實行から除外せらる可き事を基礎として、國民黨の首領ジョン・レドモンドも非自治派の張本サー・エドワード・カーソンも同意したと云ふ事が宣言せられた。然し此宣言と共に今次の約束が假の取極めであつて、窮極の決定は戰後召集せらる可き英帝國會議 (Imperial Conference) の裁決に附託するこ

ととせられた事は明白であつた。夫れから倫敦に於ても愛蘭に於ても此問題は數週間に亘つて囂ましく討論せられたのであるが、如何なる理由にや、英國の内閣は一旦取極めた約束を變更して、叛亂後一時廢止せられた愛蘭總督政廳 (Castle Government) は復古して、此問題は依然宇宙に迷うて居る。之が結果として、レドモンドは痛く英内閣に失望し、愛蘭國民は痛くレドモンドに失望した。

ダブリンを中心とする愛蘭の南部は六萬の英國兵が駐在して非常に備へて居る。英國が猫の手も借りたいと云ふ大戰忽忙の秋に際して、此の如き多數の兵を内國に備へねばならぬと云ふ事は國家に取て一大痛事と云はねばならぬ。而して之を指揮するは大戰の前四ヶ月アルスター地方の不穩を鎮壓することを拒絶した五百人の英國士官に同情せりとの故を以て其司令官の地位を辭職したサー・ジョン・フレンチ將軍である事も、一種のアイロニーである。先頃余は某雜誌に英國政府は多分サー・ロージャール・ケースメントを赦免するであらうと論じたのであるが、不幸にして余の豫言は外れて、彼は事件後數ヶ月を経て遂に刑場の露と消えた。成る程軍律から謂へば、ケースメントも其他の巨魁も刑殺せらるゝのが當然であらう。

然し若し愛蘭獨立の爲、獨逸皇帝の援助を乞ふ可く伯林に行つたと云ふ廉でケースメントを死刑に處せねばならぬと云ふならば、サー・エドワード・カーソンも一九一三年カイゼルの援助を乞ふ可く伯林に旅行し、開戦前殆ど公々然アルスターの叛亂を煽動しつゝあつた人であるから罪は正に同一である。然も一方は臺閣に列し他方は無殘なる刑死に會ふ。ダブリンの叛徒は國王の軍隊と戦う可く獨逸から武器を輸入したる故を以て嚴しき軍律に照らされ或は死刑に處せられたるに、三年前均しく國王の軍隊に反對して使用せむが爲、同じ獨逸から武器を輸入したアルスター當年の叛徒は些かの咎めだに受けず、今は何れも文武官として樞要の地位を占めて居る。愛蘭が今尙不穩の狀態に在るのは決して怪しむを要しないのである。何れにしても英國政府が切めて白耳義領公果事件と南米バトマヨ殘虐事件で英國政府に功勞があり、又愛蘭國民の間にも人望があつたサー・ロージャー・ケースメントだけなりと赦免するの度量を有たなかつた事は對愛蘭政策上非常のインポリチックであつた事は争はれない。平常冷靜にして容易に事に動じないアスクリス内閣も今回の愛蘭の叛亂には少しく興奮し過ぎたる嫌を免れない。

今春のシン・フェイン結社を中心とする愛蘭の叛亂及び其後英國政府の愛蘭問題に對する處置の真相は戦時中官憲のセンソル嚴重な爲でもあらう甚だ明瞭を缺いで居るけれど英國政府がサー・ロージャー・ケースメント其他叛徒の巨魁に對する所刑の嚴酷に失したる爲、英愛兩國國民の間に殘されたる過去數百年の悲惨なる歴史上の反目疾視の記憶が復たび茲に新たにせられたことは事實である。英國政府も愛蘭國民黨もアルスターの非自治派も今に於て互に交讓して各、誤解を去り、禍亂を未然に防ぐことを講究しないと戦後に於て或は戦争中に於ても復もや骨肉相食むの慘劇が発生しないとも限らない。英國人は流石に世界中最も廣大なる殖民地を有するだけあつて、其の異人種を統治する術策に於て殊に長じて居ると稱せられて居る。所が南阿に於て、加奈陀に於て、埃及其他の殖民地に於て見事殖民政策に成功したるアングロ・サクソンも愛蘭のケルト族の統治に就いては、悲惨なる失敗の歴史を止めて居る。是れ愛蘭に對する英國の殖民政策がヘンリ二世以來始終一貫しないで不徹底の狀態に在るからである。或帝國主義者が主張して居る如く、若し英國人が一思ひにアルスター同様土人をば全然愛蘭から放逐し

て完全なる英國の殖民を行ふか、然らずむば全く此種の殖民政策を抛棄して居たならば、愛蘭の歴史は遙に平和の歴史であつて、且愛蘭の問題は餘程簡單であつたであらう。獨逸のアルサスとロートリンゲンに於ける、奥地利の匈牙利其他に於ける、露西亞の波蘭に於ける、何れも難治は難治であるけれど、英國の愛蘭統治が幾百年の久しきに亘つて既に事功を擧ぐ可き筈なるに、恰も反比例に血腥き慘憺たる記録のみを残せるだけ却て一層其統治に不如意を感じて居るのと比較す可くもない。人種を異にし、宗教を異にし、傳説を異にし、文學を異にし、經濟上の利害を異にし、各、別の社會を組織し、而して双方互に相殺し來つた英、愛兩人種が軒を並べて生活せねばならぬと云ふことは、兩人種に取つて此上もなき不幸であらねばならぬ。愛蘭問題は實に英國の内政中最も困難なる問題である。英國の政治家が此の最大難題を無事に解決し得ざる限り、戦後當然起り來る可き英帝國統一問題や夫れに關聯する關稅改革問題等も到底圓滿なる解決を見るを得ざること云ふ迄もない。故のグラッドストーンが第一回自治案を提出して以來、愛蘭問題は依然英國政界の暗礁である。愛蘭問題は實に英國政界の重心點である。英國の政黨は此問題を

目標としてラインを分けて居るとも云へる。保守黨が統一黨に變つたのも此問題の爲である。英國上院の權能を減殺して之を不具同様にしたる有名なる國會法の通過したのも亦主として之が爲である。其他此問題と關聯したる英國政界の大波小波は殆ど枚舉に遑ない程である。今回のダブリンの叛亂は一地方の騷擾に過ぎないやうに觀ゆるけれど、此一見小事件の根柢には實に數世紀に亘つた英、愛兩民族の間に於ける反目疾視の歴史が横はつて居るのであるから、是れが真相を窮むるは實に容易の業ではない。愛蘭問題を宗教上、經濟上、憲法上、其他各方面から研究することは到底一編の論文の能く盡し得る所でない。余は差當り今回のシンフェインの叛亂が何れの邊に起因して居るか、少しく歴史に溯つて英、愛兩人種の到底渾然融和し難き關係に在る事を明かにし、愛蘭自治問題が今後如何に成行可きかに論及して見やうと思ふ。

二

愛蘭人が英國人と觸接し衝突するに至りし事を述ぶるに方つて先づ、愛蘭人の國民性を説明するの要がある。今の愛蘭人の最大要素を成して居るゲール族(Gaels)

が Scotch-highlander と均しくケルト (Celts) 人種の一派であつて、紀元前三四世紀の頃ゴール(今の佛蘭西)地方から侵入して原人種たるイベリア人(Iberians)を驅逐し愛蘭に定住したる事は歴史家の語る所である。對岸の英蘭が羅馬帝國に征服せられて中央集權的に統治せられたにも拘はらず、愛蘭は遂に羅馬帝政の治化に潤ひたる歴史を有せず、始終其の族長政治を維持して居つたのである。愛蘭の基督教も羅馬教會の宣傳を受けたものでないから、法王アドリアン四世は一一五五年勅令を發して英國王ヘンリイ二世の愛蘭征伐を奨勵し、以て愛蘭人を羅馬加持力信徒に歸依せしめやうと圖つた。愛蘭人は又中世紀に於て歐羅巴に行はれた封建制度の支配を受ける機會をも有たなかつた。是等は愛蘭人の政治に對する思想が英蘭人や他の歐羅巴大陸の諸國民の夫れと著しく異つて居る所以である。法律は愛蘭人に取つては人民の法律であつて、國王或は部落の族長は人民を代表して法律を執行するに止まり、自分の意思に隨つて新たに法律を造る權能を有たなかつた。人民は一向法律に依信したのであるから、羅馬帝政流の中央集權は行はれなかつた。法典は愛蘭民族全體の法律であつて、各部落は此法典を各自の欲する如く適用し

て夫れ／＼自治を行ひ各部落を統合して聯邦を組織したのである。愛蘭史の一權威たるエー・エス・グリーン夫人(英國史の大家ゼー・アール・グリーン氏の妻)曰く

愛蘭人合同の原動力は物質的ではなくして精神的であつた。而して愛蘭人の生存は其軍事的結合の力に依らずして、却て其各部落が齊しく同一の精神的遺産——同一の傳説、同一の光榮ある英雄の回想、同一の不磨なる法律、同一の傲りある文學を共有する結合力に繋つて居たのである。此の如き國民生活の本能が歐洲中世紀の政治的理論に反いて居ると云ふ故を以て或は之を野蠻視し、或は之を侮蔑するに當らない。少なくとも愛蘭の族長政治は歐大陸から英國に輸入せられて其政治的信條となつたけれど、愛蘭には遂に採用せられなかつた封建制度に譲らないだけの人間の德義と幸福とを發展せしむ可き制度である。愛蘭の歴史は、廣き愛蘭人の自治を以て其の確實なる基礎とする此の強き國民的生活を吞込まない限りは、到底之を了解することは出来な(Irish Nationality pp. 14-15)

夫れから愛蘭人は其全部落を支配せし法律を尊重したるのみならず、彼等は元

來多感で想像に長じ殊に崇古の精神に富むたるが故、其古英雄の偉業を歌ひ、人種特有の傳説を傳へしめんが爲、詩人、歴史家等の學者を優遇し是等に世祿を給して、銘々の天才を發揮せしめたのである。吾人は是等の詩人、歴史家の著作を通じて、愛蘭人の國民的精神が、其の驚嘆す可き慧敏と訓練せられたる知識とを發揮した上に、又眞個衡平の觀念を示現したる法典中にも、又其の豊麗にして極めて音楽美に富むたる國語中にも、又非常に巧妙なる作詩韻律の法則中にも表明せられたる事を學び得るのである。後世愛蘭人の中からパークの如き政治學者、スウィフトの如き小説家、レッキの如きマツカーシーの如き歴史大家の續出したのは、決して怪むを要しない。愛蘭國民は希臘人と羅馬人を除いては、歐羅巴の何れの國民よりも其國語に於て自負心を有つて居るのである。今回のシンフエインの愛蘭共和國宣言の中にゲール語の復古を主張し、彼等同志の間に豫ねてからゲール語の新聞を發行して居たのも決して突飛の企ではないのである。愛蘭の各部落の精神的結合力が如何に鞏固で、又愛蘭人が其祖先の精神的遺産たる法律、傳説、政體、文藝等を如何に尊重せしかば、殆ど吾人の想像以上である。再びグリーン夫人の説を引用する。

吾人が愛蘭の歴史の眞意義——政治的意味に於ては緩慢なれども精神的に緊しく結合せられたる社會でふ思想を觀察せむとするならば、愛蘭の國民生活に於て此の如く學問の進歩したる點を知らなければならぬ。各州及び各小邦で催されたる種々の會合は取りも直さず、愛蘭文明の保證である。是等の集會は愛蘭の人民が尊重する凡ての文明——民主政治、貴族政治、王道、文學、傳説、藝術、通商、遊戯、展覽會、野鄙なる道化に至るまで——の其時々々の表現であつた。祭禮が催されて、次の祭禮に至る迄の間、愛蘭人は其準備に忙がしかつた。而して人民の行爲を支配す可き數多の格言は造られた。愛蘭人が如何に深く是等の格言を遵奉して居たかと云ふことは、彼等が熱心に傳説を保持し、其歴史の暗黒時代から第十七世紀に至る迄、尙愛蘭の法律を研究し、其學者の講演を聴く可く、丘陵上の會合 Meeting on hills を催した事に依つても察することが出来る。(Irish Nationality pp. 20-21)

グリーン夫人の所説は愛蘭の族長政治の特質を述べて聊か過褒の嫌あるを免れないけれど、愛蘭人の此の如き強烈なる國民性は下に説明する如き種々の事情

に依つて長養せられ刺戟せられて、幾多の慘憺たる歴史のページを編むで今日まで傳へられ終に這回の動亂に及むたのである。

三

以上は愛蘭の國民性の一斑を描き得たりと信するを以て、余は次に英、愛兩國國民の關係即ち兩民族の觸接と、其れに續く悲慘なる衝突の歴史を略叙しやうと思ふ。英國にケルト族なるブリトン人が部落的生活を營むで居た間は愛蘭の同一人種との間に何等の衝突も起らなかつた。兩國の間に政治的關係の始めて發生したのは實にヘンリー二世の治世である。武勇で經綸に長じて居たヘンリー王は其配下なるノルマン武士を賞する土地の缺乏を感じて、ストロングボーン等をして愛蘭を征伐せしめた。元來慍悍なる愛蘭のゲール族も、軍隊の組織整備して武器の精銳なるノルマン軍に對しては其敵でなかつた。所がヘンリーは是等の愛蘭移住のノルマン武士が王命に従はないのを愠つて後年親から同島に渡航して、愛蘭土人からと均しく、ノルマン移住者からも忠順の誓約を獲得した。然るにヘンリーの征服したるは愛蘭の一部に止まつて居た。上述の如く、愛蘭は羅馬帝政の治化に浴しなかつたが爲、文明の脈管たる道路と名づく可きものがなく、王の英資を以てしても比較的優良なるアングロ・ノルマン文明を此地に輸入する方便がなかつたのである。此の如く文明の道に進む可き豫備的事業が缺如して居たのが、愛蘭の地に長く族長政治が行はれて愛蘭人をして容易に英國人と同化せしむる能はざる一種の國民性を培養した理由である。

愛蘭に英國の政令の行はれて居たのは首府ダブリン附近の一區域(英國史の所謂 Pale)に限られて僻陬の地には其後久しく古來のゲールの族長政治が行はれて居たのであるが、如何にもして愛蘭全土に對する適當なる政治機關を確立しやうと、眞面目に努力したのは實にヘンリー八世であつた。然し英國の愛蘭統治が稍、整頓したのは、チャールズ一世の治世に、ストラッドフォードが得意の果斷政略を遂行した後の事であつた。

然し英、愛兩國國民間の關係を甚だしく險惡に導いたものは宗教問題と、之に關聯する佛蘭西及び西班牙等の愛蘭人煽動であつた。ヘンリー八世のカタリナ皇后離婚事件を動機として起つた英國の宗教改革は、數回の反動を経たる後結局アング

リカン教會を確立する事となつた。英國人は此國教をば往昔のケルティック教會から羅馬教會に改宗して居た愛蘭人の間に強制的に弘布しやうと試みた。エリザベス時代の愛蘭征伐も、クロムエルの愛蘭人虐殺も舊教徒土人と英國から移住したる羅馬教徒に新教を強制せむとして彼等の反抗を招いた結果である。爲めに土人は土地を奪はれて英國から新教徒が數多移住して來た。一方に於て西班牙のフィリップ二世や佛國のルイ十四世は帝王神權説と羅馬教とを提げて英國をも壓倒せむと企て、英國人の最も尊重する古來の民主的憲法と英國臣民の自由は爲めに屢々危急に瀕したのである。併かもスチュアート系の諸王が英國人民の自由に對する隱謀の策源地が毎時西佛兩國外交の操縦に任かする愛蘭舊教徒の間に在つたので英愛兩國民間の反目疾視と從て起りし鬭争は益々深刻を極むるに至つた。既に政治上の軋轢に加るに更らに宗教上の葛藤を以てす、英愛交渉の歴史が彌々血腥くなるのは止むを得ない次第である。即ち從來の英國人、愛蘭人の區別は一變して新教徒と羅馬教徒との關係となつて來た。卓見なるクロムエルは豪健なる清教徒及び彼の配下の鐵甲隊を愛蘭に移住せしめて、是等の骨子に新附土人の健全

なる肉を着けしめ以て、茲に新奇なる國民的生活を開始しやうと企圖したのである。けれど、所謂沙翁時代と權利券狀時代との間に發生したる新英國の文化とアン・グロ・アイリッシュ・文明との間には著るしき鴻溝があつて、兩民族の親和策は效を奏せず、アルスター州一圓とダブリン附近に新教徒の殖民地が建設せられたに過ぎなかつた。愛蘭に政廳は設けられたけれど、其政廳は一部新教徒の政府であつて丘陵と沼澤とを以て城塞とする邊僻の地に追込まれたる愛蘭土人は殆ど王化に霑はず、益々文明の退歩するのみであつた。其れに又種々の法律が出來て羅馬教徒たる者は土地の所有も之を子孫に傳ふことも禁止せられたのみならず、官公吏になることも、議員に選ばれる事も選ぶ事も出來なかつた。夫れから舊教徒は學校を建つることも禁せられた。新教徒の舊教徒を迫害する實に酷烈を極めたのである。此の如き狀態の永續する能はざるは云ふ迄もない。

四

實際愛蘭には五百年以上に亘つて國會と名づく可きものが在つたのである。此國會は最初の二百年間と最後の二十年間は、少なくとも理論上に於ては、立法上の

獨立を有つて居たのである。然し最初二百年間の國會は愛蘭人の國會ではなくして、アングロ・ノルマン國會に過ぎなかつた。ヘンリー七世の時アングロ・ノルマン植民地が漸く獨立の精神を現はして來たので、愛蘭史上に有名なる Poyning's Law が英國會を通過して、件の愛蘭國會は發案權を剝奪せられ、英國樞密院の嚴重なる監督を加へらるる事となつた。爾後第十八世紀の後半に至る迄、愛蘭國會は畢竟英國會の影法師に過ぎなかつたのである。所が、愛蘭の舊教徒に宗教上の迫害を加へたのみならず、其の土地を奪て經濟上にも種々の壓迫を加へて優勝の地位を占めたる新教徒が通商工業の上にも漸く隆盛に趣いて、本家たる英國人と競争せむ勢を示して來たので、英國人は之を嫉視するに至つた。愛蘭の依然農業國たらむことを希望した英國會は、種々法律を設けて愛蘭の産業に干渉を加へた。是に於てか愛蘭の新舊兩教徒は平生の怨恨を忘れて、一致して愛蘭の爲に英本國と抗爭することゝなつた。當時ダブリン大學にはバークレイやバークやゴールドスミス等の人物輩出して、劍橋、牛津兩大學にも讓らざる愛蘭人の知識的活動を發揮したと共に、愛蘭各地方の愛國心は熾烈なるものがあつた。恰も此時北米十三州の殖民地は英本

國に反對して獨立の宣言を發布したので、愛蘭の此精神は一層活氣を呈して來た。仍で愛蘭新教徒の中から義勇軍が組織せられて、米國殖民地に援助を與へやうとするので、英國政府も遂に一七八二年愛蘭の産業を束縛した諸法律及び Poyning's Law を廢止して、愛蘭國會の立法的獨立を承認せねばならぬことゝなつた。所が此國會は依然新教徒の國會で、愛蘭住民の九分の八を占むる舊教徒は依然與らないのであつた。尤も舊教徒に對する甚だしい束縛は解かれ、又選舉權だけは與へられたけれど、彼等は尙議員に舉げらるゝことが出來ず、愛蘭土人は依然被征服者の地位に泣かねばならなかつた。再言すれば、一七八二年の愛蘭國會は、今日ダブリンの國會復古に強く反對しつゝある愛蘭人の一部が英國々家の危急存亡に乗じて、武力に依つて贏ち得たる國會に過ぎなかつたのである。是等新教徒の眞意は愛蘭に寡頭政治を行ひ、英本國の干渉を受けずして、恣に愛蘭政治界の利益を壟斷しやうとする汚れたる動機も多少混じて居たのであるから、多數舊教徒の利益などは、殆ど其の顧る所でなかつた。此國會が腐敗に腐敗して結局ピットの買収に任せ、二十年を出でずして滅却したのは固より其所である。

一方に於て一七八二年の國會に失望したる愛蘭の舊教徒は羅馬教徒の上に未だ多く殘存して居る束縛を除かむとの運動を起し、此運動は愛蘭の政廳をして愛蘭の國會に對して責任を負はせやうと云ふ急激派の運動と相俟つて、同島の形勢が大分不穩になつて來た。此の如き形勢を看取したる佛國の執政官政府(Directory)も、續いては奈破翁政府も、英國と云ふ最も頑強なる敵に對して打撃を加へるは此秋に在りとして、種々の術策を用ひて、愛蘭人の對英惡感を煽動した。一七九八年の愛蘭の叛亂は英國政府と愛蘭國會との協力に依て鎮壓せられたけれど、ピットは純然たる新教徒の國會を愛蘭に存置するよりも蘇格蘭國會に於けると均しく、寧ろ之を英國會に合併した方が、愛蘭の爲にも、又英帝國の爲にも幸福であると信じ、たのである。ピットが一八〇〇年合同法(Act of Union)を通過させて、結局愛蘭國會の議席を一個七千五百磅の割合で買收した事は、今日の政治道德から云へば、批難す可きであらうが、當時の經世家の施設としては、蓋し己むを得ない處置であつたであらう。

五

一八〇〇年の合同法に對して幾多の非難は加へらるゝけれど、英愛の合同はヘンリー二世の愛蘭征伐から來る當然の成行である。既に一七〇三年英國會と蘇格蘭の國會が合同せられた以上は、次ぎに愛蘭の國會が合併せらるゝのは、英帝國統一政策から見ても避く可からざる勢である。然し英愛の合同は豫期の好結果を齎らすことが出来なかつた。ピットは合同法を通過せしめた後、愛蘭の舊教徒が未だ被れる幾多の束縛を解除せむと企望して居たのであるが、ジョージ三世は舊教徒の解放を以て自己即位の宣誓に戻ると云ふので、最も強く之に反對し爲に發狂するに至つたので、流石不世出の政治家も如何ともすることが出来ず、實際合同の決定せらるゝとき豫定の計畫の一部であつた舊教徒解放(Catholic Emancipation)は一八二九年まで通過を見なかつた。Two Irish Nationsの著者故のモニーペンニ氏は英、蘇兩國會の合併せられた時であつたらば、愛蘭は大英國との合同を歓迎したであらう。何れにしても十八世紀の前半中に英愛の合併を斷行し、英蘇合同の場合と均しく、愛蘭の商工業に對する束縛を解除したらむには、愛蘭は必然之を歓迎したのであらう。所が十八世紀の後半に至つては、愛蘭國會を左右した新教徒の中に、準國

民的精神が發揮せられて、大に合同を妨礙した云々と論じて居る。ピットの敏腕に依つて合同は遂げられたけれど、愛蘭舊教徒の不平は嘗だに慰撫せられないのみならず、却て合同に伴ひたる新教徒の横暴なる態度に依て一層英國人及び愛蘭の新教徒に對する憤恨を増加したのである。而して初めて愛蘭の舊教徒をば國民的基礎に立つたる一種の政治的團體に結合したのは、ダニエル・オーコンネルが之を組織し之を引率したる舊教徒解放の運動である。此舊教徒の運動が激烈に赴くに連れて、愛蘭の新教徒は自家の存立を脅かすものと做して、嘗て英本國に對して抱いて居つた反感嫉妬を忘れて、愛蘭の舊教徒に對抗する保護者として之を仰ぐに至つた。即ち舊教徒の英本國に對する反感加はると恰も反比例に新教徒は益、英本國に接近するに至つたのである。オーコンネル指揮の下に大々的示威運動が行はれ、あはや内亂勃發せむす由々しい形勢を呈したので、英國政府は一八二九年所謂舊教徒解放令を發布し、舊教徒と雖、國會議員たる事を許したのみならず、事實に於て官吏に任せらるゝ事も市町村の名譽職に擧げらるゝ事も默認するに至つた。併し此法律發布後も尙舊教徒は特別法の規定の爲に集會、出版並びに人體に屬する

權等を制限せられて居たので、愛蘭土人の騷擾は中々に鎮撫せられなかつた。然し合同後の國會にても、其後大に愛蘭の状態を改善する必要を認めて、舊教徒の最も疾苦とする什一税 (tithe) を廢し、地方自治法を制定し、土人から剝奪したる土地に住居したる新教徒の子孫を立退かしめ、一八六九年には愛蘭に於ける英國々教の廢止を斷行して、切りに反目疾視せる兩人種の調和を圖つた。是等の事件の敘述は徒らに煩雜に亘るから、之を省略して、直ちに本題に直接の關係あるフェニアン同胞團の暴動を説述する。

六

オーコンネルは一八四〇年合同法廢止同盟 (Repeal Association) を創立して、英愛の分離に盡瘁した。又一八四二年には青年愛蘭 (Young Ireland) と稱する文才ある青年の一團が The Nation と稱する新聞を發行して、合同法廢止の運動を行つたが、是等の運動は一八四三年八月ビール内閣がクロンターフの大集會を禁止し、オーコンネルも其命令に服從したので、大事に至らずして終熄した。元來オーコンネルは口舌では随分危激の言を吐いたけれど、暴力に訴ふことは好まなかつた。是れ即

ち彼が愛蘭人の間に名聲を失墜した重なる原因であつたのである。彼の死(一八四七年)と共に合同廢止運動も一時頓挫し、此前後度々の大飢饉で愛蘭人は深刻なる怨恨を懷いて米國に移住する者陸續相次いだ。是等の移民者は後日米國で富を造り大に故國の獨立運動に資を供したのである。

フェニアン同胞團(Fenian Brotherhood)は一八五七年米國に於ける愛蘭の移民及び其子孫から組織せられた結社であつて、其目的とする所は愛蘭の國民的獨立を遂げて愛蘭共和國を立つるに在る。取りも直さず今回のシンフェイン結社其他團體の先驅であつたのである。米國南北戦争の終つた際双方殊に南方方に味方して戦つた所謂アイリッシュ・アメリカンは其餘勇を奮つて故郷愛蘭に叛亂を起し、新教徒に奪はれた土地の沒收を行らうと企てた。ダフリンにはThe Irish Peopleと稱するフェニアン同胞團の機關紙が發行せられた。此同胞團領袖の策略は士官と一隊の兵士を連れて愛蘭に上陸し、農民を煽動して相呼應して一舉に地主から土地を奪回し、之を分配しやうと云ふのであつた。仍で先づ代表者を愛蘭に派遣して、密かに準備せしめた。都市の青年や各地浮浪の徒の嘯集に應じた者が數千名に及び、又

巧に英國から駐屯して居る軍隊を誘惑して、密かに其武器や軍需品を提供せしめやうと圖つた。然し是等の運動は甚い失敗に畢つた。夫れは愛蘭の僧侶はフェニアンの主義をば惡む可き無政府主義として攻撃したのみならず、借地人等も地代の減少とか借地法改正等の運動ならば歡むで應じたかも知れないが、革命が起れば彼等が現に占領して居た土地を取上げらるゝであらうと恐れて自家頭上の利害から此運動に参加するに至らなかつた。アイリッシュ・アメリカン兵士は一八六七年の春愛蘭に上陸したけれど、新聞紙上の景氣に引かへ、實際彼等と行動を共にする兵士を發見しなかつた。仍で彼等の或者は捕縛せられ、或者は逃亡し、三四の小隊は血を流すことなくして憲兵の爲に追散らされた。二三の領袖は裁判を受けて處刑せられ、此運動は大事に至らずして鎮壓せられた。フェニアンの餘黨は英國に於ても其後暴行を演じた。夫れから米國戦争の終末に際し、一千二百名から成るフェニアンの軍隊は加奈陀の國境に侵入し、ナイアガラ川を越へて一二の要地を占領したけれど、豫期の援兵米國から來らず、ワシントン政府も之を助けなかつたので、忽ち加奈陀義勇兵や警官の爲に撃退せられて、其首魁は捕はれて、失敗に畢つたので

ある。此の如くフェニアンの叛亂は各地共に失敗に畢つたけれど、フェニアンの團員が法廷に於ける陳述は、犯罪者の辯護には似ないで寧ろ殉教者の説教と云ふ口吻があつて、聴く者をして痛く感動せしめた。爲に大に英國人の愛蘭問題に對する注意を喚起し、遂に此問題に新生面を開くに至つたのである。

七

愛蘭に於ける英、愛兩民族——アルスター地方寧ろ Protestant Ireland と呼ぶが適當)の新教徒と他の三地方(寧ろ Catholic Ireland)の舊教徒——の軋轢競争の激烈なるは舊教徒が過去に於て蒙つた不正壓虐の記憶がゲールの傳説と共に子々孫々に傳へられて怨恨不平が常に新たにせられたるに因るのは勿論であるが、就中兩民族の宗教の相違が凡ての根本の原因である事は上來の所述に徴しても明白である。仍て愛蘭に於ける有ゆる弊政の根原が同地の英國々教に在りと認めて、一八六九年愛蘭國教廢止法案を通過せしめたのは人道的政治家の典型グラッドストーンであつたけれど此の國教廢止だけでは未だ愛蘭人の疾苦を救済することが出来なかつた。而して始めて愛蘭の自治運動に着手したのはダブリンの辯護士で、英國會の

保守黨議員たるアイザック・パットであつたが、彼が一八七〇年此運動を開始したのは、ダブリンの裁判所でフェニアン同胞團を辯護したのが縁となつて、自治反對論者から自治論の急先鋒となつたのも運命の皮肉である。(自治 Home Rule の語も彼が最初に用ひた)パットを改宗せしめたと略ぼ同一手段を用ひて、フェニアン同胞團員等は、愛蘭の新教地主の家に産れ、劔橋で教育を受けたパーネルをも強烈なる愛蘭自治主張者に改宗せしめたのである。元來一八七〇年まで愛蘭の志士は専ら一八〇〇年の合同法廢止を遂げやうと運動したのであつた。然るに愛蘭の自治と云ふことは、決して合同法に依て制定せられた條項を廢止しやうと要求するのではなくして、合衆王國共同の政務は大英國會に於て之を決すると云ふ事は最初から其の認めたる所である。換言すれば、愛蘭自治は英帝國の政務と大英國内に於ける各國民の政務とを區別して、國民的政務に屬するものは之を愛蘭の國會に引渡さしめやうとの要求である。パットの後を承けてパーネルが愛蘭自治派の首領となり、六十名餘の同志議員を率ゐて英國會の議場を猛烈に喧擾せしめし大示威運動と、一八八二年愛蘭總督と次官とが無残にもダブリンの公園で暗殺せられた

椿事とは、痛く英國の政界を驚愕せしめた。是等がグラッドストーンをして一八八六年と一八九三年と前後二回愛蘭自治案を提出せしめた重なる動機であつた。其後愛蘭自治に就いては久しく聴く所がなかつたが、アスキース内閣は一九一〇年國會法を制定したる餘勢を以て現今の愛蘭自治法を通過せしめた事は、世間の周知する如くである。要するに愛蘭問題の中心は愛蘭自治問題に在る。幾百年に亘る愛蘭國民の疾苦を救済す可きは一に自治法の實施如何に繫つて居るのである。約半世紀に亘る愛蘭自治運動の顛末を繹ね、並びに前後三回の自治法案の内容を考覈することは、晩近の英國政治史上最も興味ある問題に屬するけれど、是等の説明は他日に譲り、此處には今回の愛蘭叛亂事件を了解するに必要な範圍内に於て自治問題を説述しやうと思ふ。

愛蘭自治問題は四拾年以上に亘つて論究せられたのであるが、本年九月號ラウソンドレーブル誌の所説は此問題の賛否兩論を最も公平に摘要して居ると思ふから、茲に其れを紹介する。愛蘭自治賛成論の論據は次の三要點に在る。(一)愛蘭人は全然英國人と別個の人民である事故に若し彼等にして希望するときは當然自家の

政務を行ふ權利があると云ふ事。(二)愛蘭は英國と異なる國柄である事、随つて合衆王國の一部として全く倫敦に定着したる英國政府及び英國國會が之を支配せむとする企ては失敗である事。賛成論者は尙何れの内閣も國會の多數も愛蘭に就て知る所なく随つて之に注意する所なき事、彼等は又嘗て大英國のみならず英帝國の内外に關係したる最も急要なる政務に忙殺せらるゝ事、随つて有ゆる愛蘭の改革方策は時日大に遅延し、騷擾を経て後辛く國會を通過し然も動もすれば通過の際該方策は英國人の僻見と無識との爲、改惡せらるゝ事等を指摘して居る。彼等は又愛蘭飢饉に對して官憲の失策したることから、晩近には愛蘭大臣バーレル氏の政廳拋棄に至る迄の行政上失敗の數々を列擧して居る。而して彼等は愛蘭人の自治に放任して居たならば愛蘭は一層迅速に進歩して居たであらうと論ずるのである。(三)近年になつて今一個かう云ふ議論が多數の賛成者を得て來た。最初多數の責任ある愛蘭人は殊に土地問題の未決定の間、愛蘭人の有權者は自から自分の政治を任せらるゝだけの教育がないと云ふ點に於て統一黨と同意見であつた。然るに教育の進歩——縱令充分でないにせよ——と、愛蘭地方政治に關する諸法律の施

行に伴ふ經驗と、就中一九〇三年の土地買収法とに依て地主の權利を剝奪して小作人を土地所有者たらしめた事等は、大變化を齎らしたと、自治賛成者は主張するに至つたのである。彼等は愛蘭人の多數が政治的に進歩して居らず、企業心に乏しく、併かも演説や騷擾に容易に雷同すると云ふけれど、其等の缺點は愛蘭人が欲する所のものを獲得するには英國に對して黨派的壓迫を加へなければならぬが如き制度の罪が與つて多きに居る事、而して彼等に政治の責任を負はすれば、是等の缺點を醫する最良の方法であると同時に、是れが個人的自尊と並びに國民的自信の唯一の基礎であると論じて居る。アングロ・サクソンの世界が今日あるを致したのも人民が責任を負ふ政府の賜である。明日愛蘭人の世界を救済するのも同一の責任政治でなければならぬと恚う云ふのである。

統一黨も亦三個の理由に據て愛蘭自治に反對した。(一)愛蘭自治は英帝國の安全と相容れざる事。統一黨は常に自治運動が聯邦制度に對する信仰の爲でなくして、愛蘭の獨立に進む階段として歓迎せられたことを信じて疑はない。而して彼等は又ダブリンの愛蘭政府は一朝戦争に際して縦し外敵を實際援けないまでも、英帝國

の國防を妨害するに至る可き程に愛蘭人の排英心は強烈であると信じて居る。(二)統一黨は、愛蘭自治は同島に於ける舊教徒の優勢を導く可き事、而して此の如き状態ともならば比較的無學なる愛蘭農民の政治は宗教上僻見に支配せられて、少數新教徒の境遇をして忍ぶ可らざるものたらしめむとの理由からして自治に反對して居る。(三)統一黨は現在の英愛合同法をば充分の價值あるものとして支持して居る。彼等は國民性と云ふ精神には同情して居らぬ。統一黨員に取つて最も大切なものは法律を以て治ることと、生命財産の安固と、從つて個人的企業の安固とであつて、是等が愛蘭自治に依つては現在の政廳の下に於けるよりも改善せられ得ないことを指摘して居る。彼等は愛蘭政廳が緩慢であつたことを認めて居るが、彼等は之を以て愛蘭自治の騷擾以外萬事を拋棄した國民黨代表者の罪に歸す可きものであると論じ、而して又彼等は國民黨の代表者等が英國會に於ける立法及び改革の一般事業に盡瘁して居たならば、——せめて自治案の主張の時だけなりとも——以上の諸缺點は久しい以前に救済せられたであらうと論じて居る。彼等はアルスターの迅速なる發展を指摘して、現在の政治組織は愛蘭の他地方が同一方法

に依つて進歩す可き何等の妨礙ともならないではないかと反問して居る。要するに彼等は愛蘭に於ける宗教的乃至黨派的感情の激烈なるを見て王國の一部として共同の國會に依て愛蘭を支配し、之に與るに善政と寛容の保證とを以てし、何れの黨派にも優先權を獲得せしめざることを、するものが、矢張り最善の制度であると信じ、尙愛蘭を政黨及び宗教の闘争の巷に復歸せしめ、ダブリンの自治政府に必然伴ふ可きものと彼等の信ずる政治的無經驗なる多數黨の失政に放任することは愛蘭に取つても、英帝國に取つても不利益であると信じて居る。彼等の見る所では合同國會は決して英國が愛蘭を支配するのではなく、合衆王國の代表者が行ふ合衆王國の政府であると云ふのである。

以上は愛蘭自治に對する賛否兩論の要點であるが、尙統一黨の側では主張するのである。愛蘭自治法は唯だ愛蘭に國民的政府を創設しやうとの企畫であるのみならず、愛蘭に於ける少數黨たる新教徒をば英國政府の手から引き離してダブリンなる彼等と、犬猿も當ならざる舊教徒の多數を占むる國會の配下に置かうとする實に憲法上の大問題である。かゝる大問題を其の最も直接の利害關係あるアル

スター地方人民の意思に問ふことなく、又廣く英國人民の多數選舉に訴へずして、自由黨と國民黨とが一氣に法律として之を實施しやうと云ふは、立憲國にあるまじき横暴である。換言すれば、統一黨の方では愛蘭自治問題は未だ選舉競争の題目となつたのでないから、之を法律として實施する前に方つて須らく國會を解散して全國の總選舉に問へと言ふのである。然し愛蘭の自治と云ふ事は、グラッドストーン以來の自由黨の重なる政策であつたことは天下周知の事實であるから自由黨が政府に立てば愛蘭國民黨の壓迫に因つて早晩此法案を提起す可きは、英國の選舉人の多數も諒知して居る筈であるから、統一黨の此主張は我田引水の説であると思ふ。然し統一黨側の主張の當否は別問題として、アルスターの新教徒が現愛蘭自治法の實施に對して戰後に於ても強烈なる反對を爲す可き事は疑を容れざる所である。今回の愛蘭シンフェインの叛亂の真相を了解せむとするには先づ同地方の状態に就いて少しく説明せねばならぬ。